

加古祐二郎のこと、園部敏のこと

園部逸夫

はじめに

加古祐二郎は亡妻の母方の叔父であり園部敏は私の父である。この二人について書くようにとのことである。それぞれのプロフィールについては、『立命館大学法学部創立百周年記念誌』七二頁に平野仁彦教授の九四頁に安本典夫教授のいずれも間然する所のない紹介があるのでご覧頂きたい。

一 加古祐二郎のこと

加古祐二郎について私の亡妻路子は小さいときに見た記憶があるという程度である。祐二郎のきょうだいは、兄長男亡哲太郎、二人の姉長女亡ツタ（画家亡吉田耕雨の妻）、二女なみ（京大名譽教授亡長谷川万吉の妻）、妹三女亡廉子（フランス文学者亡宮本正清の妻）である。

現在、路子の母なみは北白川小倉町に住み、九七歳で健在だが、当時のことを鮮明に語ることはできない。

同じく北白川別当町に住むツタの一人娘である一戸智子に最近会う機会があり、生前の祐二郎についてのかすかな記憶を引き出すことができた。私は聞き取りの専門家ではないから、特段の準備もなく、メモを取る程度のものであったので、印象を述べるにとどめる。

祐二郎は昭和八年の京大事件で連袂して辞表を提出し、昭和八年八月二日付けの辞令を受け取っている。このあたりの日記からは、祐二郎はかなり疲労しかつ落ち着かない様子が伺える。祐二郎は、京大を辞めて、立命館大学法学部の法理学、社会法の教授になるが、智子の記憶がはっきりしているのはその頃からである。

なお、京大事件の経緯と辞職教授を立命館に招聘した背景については『立命館百年史』通史一の四七二頁以下が最も詳細である。立命館側から見た京大事件として貴重な研究である。

祐二郎の日記によれば、母の亡久（ひき）、ツタと智子、宮本正清と廉子を連れて叡山に遊んだり（昭和八年八月



左から なみ ツタ 祐二郎 廉子

二八日、法政大学現代法研究所叢書11『昭和精神史の一断面』二二三頁）、智子と甥の亡長谷川博一（路子の異母兄、京大名誉教授）を連れて八瀬で小半日を費やしたりしている（二月五日、前掲書二三四頁）。「智子と博一両氏」と書いているが二人ともまだ少年少女だった。智子によれば、由良の海岸で一緒に泳いだことがあるという。

祐二郎は気の優しい人で、背が高く、スタイルも良く、標準語を話した。茶系の背広を好み、カフスポタシとネクタイが印象的であった。家では大島を着ていた。久も背の高い人で、若いとき高砂小町と呼ばれた（加古家の郷里は兵庫県高砂）。祐二郎は晩年北白川小倉町に久と住んでいた。二階が書齋で祐二郎の勉強中はしつしつといわれたことを覚えている。階下の応接間でベーターベンレコードなど聞かされることがあったが、幼い智子は退屈で「ごそごそ」していた。

祐二郎は昭和十一年の夏から十二年七月二〇日に亡くなるまで、肺結核の療養のため京都帝国大学附属病院に入院している。智子の記憶では、ツタに連れられて、何度も見舞いに出かけている。

一二年の正月に振り袖を来て、見舞いに行ったとき、祐二郎から、誰に言うともなく、いずれ時代がひっくり返る、贅沢もできなくなるという趣旨の発言があったという。また別のとき、ベッド上の祐二郎のつぶつた目から涙が流れていたのを見たという。祐二郎の思想傾向は特別高等警察（いわゆる特高、思想警察のこと）の取り締まりの対象になっていたこともあって、病床で日本の将来を見越していたのではないかと思われる（当時の吉田、北白川、下鴨の地理的關係と京都における人民戦線の文化運動については、毎日コミュニケーションズ『昭和ニュース事典』VI資料編八八頁参照）。

最後に、智子の追憶から大事なことを一つ。智子「祐二郎おじさんは、滝川先生は坊ちゃん、もう一寸考えて下されば、一蓮託生なのだから、もう少し辛抱して下さったらと仰っていましたね」私「それは、確かなことですか。とても大事なご記憶ですよ」智子「私の記憶に確かに残っています」私「それでは、そのように伺っておきましょう」

私事に涉るが、私ども夫婦は滝川幸辰博士ご夫妻に媒酌をお願いしており、毎年五月二六日神田の学士会館で開かれる滝川事件記念会にも出席している。滝川博士の生前にその讐咳に接することのできた者の一人として、祐二郎の右のような感想を漏れ聞いて、なるほどと感じ入った次第である。

臨終を迎え、佐々木惣一、恒藤恭、末川博の各先生を始め何十人もの見舞客が詰めかけ、智子ら一族は廊下に立って迎えたという。

昭和一二年の夏、私は小学校三年、台湾台北に居た。この年『国体の本義』が配布され、日中戦争が始まった。

祐二郎は京大事件でいわゆる玉碎組に属していたが、残留組や復帰組の行動にも理解を示していた。健康であれば、戦後京大に復帰するチャンスもあったかも知れない。京大事件は法学部のフアカルティや同窓会などの後の活動に大きな影響を及ぼした。いろいろな意味でぎくしゃくもしたし、亀裂も生じた。はっきりものを言わず陰湿に低迷する風潮もあった。

しかし、時代は変わった。京都大学大学院法学研究科・法学部が発行した『京大法学部百年の歩み』（平成一一年）は、祐二郎がその日記の中で玉碎組の独善主義を批判した部分を引用しつつ、京大事件は法学部に



園部 敏

とって「輝かしくそして悲痛な、永遠に消えることのない刻印である」と正当に総括した。私はこの記述を、京大事件についておおよそ正面から語ることのなかった京大法学部での私の経験に照らし、感慨深く受け止めている。

二 園部敏のこと

読み方はサトシである。ピンではない。敏は、岐阜県で生まれ、当時の朝鮮京城（ソウル）の京城中学を卒業し、旧制五高を卒業（佐藤栄作が同期）東京帝大法学部独法科に学んだ。在学中、関東大震災に遭った。美濃部達吉博士の薫陶を受けているが、どのような関係であったかは聞いていない。京城法学専門学校教授から台北帝国大学教授になるとき、美濃部博士の推挽を受けたことは聞いている。

敏は小さい時に熱病を患い、大人になったら耳が聞こえなくなるといわれたが、そこまでは悪化しなかった。ただ難聴ではあった。母も私声が大きくなった。父に聞かれたくないことを母と小声でしゃべると、聞こえているとどなられた。勝手な耳だった。それはともかく、難聴が教職を選んだ理由かも知れない。立命館大学法学部長の仕事をよく引き受けたと思う。周囲の方にはご迷惑だった。聞こえても聞こえなくても相槌だけは打っていたから。

京城法学専門学校教授の頃は私はまだ小さかったから、よく覚えていない。ソウルの南山の麓の大和町（今の筆洞^{ヒムドン}）に敏一家の住んだ総督府官舎が並んでいた。戦後韓国には二度行ったが、一度目は芦部信喜さんと一緒に探したところ、幸いに残っていた。二度目に行ったときは、取り壊しの一〇日前であった。中に入れてもらって昔を偲んだ。その家は私たちが引つ越したあと、父の同僚であった木村常信さん（後に京大教授）一家が住んでいた。ということは木村汎さんも故山村美紗さんも小さいとき住んでいたかも知れない。

京城法学専門学校は当時の日本では唯一の官立の法学専門学校であった。朝鮮出身の学生を多数受け入れたという特徴もあった。ソウル大学の歴史の資料に、当時の教授陣の名簿が掲載されている。台北に引越すとき、ソウルから釜山まで列車に乗ったが、各駅に教え子達が恩師の敏を待ち受け見送ってくれた。敏がその度にデッキに出て、歓呼の声に挨拶していたことを覚えている。

台北帝大の研究室にはよく遊びに行った。廊下にギールケだったか、ドイツ人らしい人物の額が掛けてあった。研究室一杯の本棚に洋書が詰まっていて、ハイカラな感じだった。私は中学生だったが、異文化に対するあこがれを抱いた。タイピストの女性に可愛がられたのを覚えている。美人で、海軍の下士官と結婚した。台北帝国大学文政学部が正式の名称である。文学科、史学科、政学科があり、法律は政学科で教えていた。中村哲さん、後藤清さん、堀豊彦さん、宮崎孝治郎さん、そして西村信雄さん等、学者らしい学者が沢山居た。官舎は大学の近くにあり、教授、助教授、助手と身分によって広さが違ったが、それがうまく組み合わされていた。日本家屋だが、今でも、一部残っている。昔は昭和町、今の温州街。私の育った官舎のあったところはマンションになっている。私の住んでいた官舎の裏隣は、ヒノキチオールの野副鉄男さんだった。

他に日本史の岩生成一さん、小葉田淳さん等々、一流の学者が居た。

先年台北を訪れたとき、台湾大学の父の研究室のあったところを探した。建物も部屋もそのままだった。違う学部になっており、どの部屋かははっきりしなかったが、雰囲気は残っていた。当時の書物は、昔の台北高商、今の台湾大学法学院の図書室にあった。

敏はこの研究室で一〇年研究した。待遇も良かったし、サイドワークもする必要がなかった。授業の負担も多くはなかったと思う。昔の大学教授は恵まれていた。数も少なかったが。

そして、戦争がたけなわになる。官舎の庭に防空壕を掘った。電柱に竹の輪をぶら下げてバケツで水をぶっかける訓練をしていた。敏は柄にもなく、隣組の班長などを務めさせられて指揮をした。台湾が受けた空襲は焼夷弾ではなく、爆弾だった。昭和二〇年の春、中学は四年で卒業ということになり、父の薦めもあって私は旧制台北高校の理乙（今の医学進学課程）に入学したが、入学と同時にクラス編成のまま、召集を受け、陸軍二等兵となり、台北北部の山中に竹と茅で兵舎を建て、昼間は壕を掘って米軍の上陸に備えた。一六歳だった。敏は心配だったのか、山の中まで面会に来た。戦雲は急を告げ、敏は、然るべき筋から、戒嚴令の研究を依頼された。米軍は沖縄へ上陸し、私は命拾いをした。中華民國の軍隊により武装解除され、一等兵となって除隊（兵役解除）した。家に帰ってみると、家族は、台湾の中部の山に近い小さな街の郊外に疎開していた。敏は大学関係者の疎開のために奔走したという。

昭和二〇年の年末限りで、敏ら文科系の教授達は一斉に免職となった。大学官舎を立ち退き、知り合いの家の一間を借りて、昭和二一年の春に日本に引き揚げるまで住んだ。各行李一個と千円の所持を許され、

基隆キールンの港から、米軍のリバティー船に乗り、広島県大竹に引き揚げた。皆、船酔いに苦しんだが、敏は食欲旺盛で、私は、敏のために甲板から船倉喫水線あたりのねぐらまでやつとの思いで、食事を運んだ。岐阜の空襲で焼け出された母方の実家を訪ね、岐阜市郊外の本田村ほんでんに間借りをした。敏は、熱心に配給の小麦を炊いた。その秋から、私は金沢で旧制四高生活を始め、父母と妹は東京に出た。東京でも、当時の西大久保や諏訪町で間借り生活をした。西大久保ではドラム缶の風呂にも入った。一面の焼け野原で新大久保の駅がよく見えた。敏は、痔疾に悩みながら明治大学教授や中央大学、法政大学等の講師を務めたが、住宅事情のため、豊橋の愛知大学に移った。私は、休暇中は、金沢から豊橋に帰省することになった。家族は、愛知大学が使っていた予備士官学校の兵舎の一角に住んでいた。昭和二五年に、敏は、立命館大学教授として京都に移った。

立命館が京都の下鴨中川原町に用意した小さいながら一戸建の日本家屋に住むことになった。私も、京大の学生時代をそこで過ごした。私が京大法学部からアメリカ留学のため出張中に父が北園町に小さな家を買ひ、私達夫婦も子供と一緒に同居した。その後、私と私の家族は東京に転居し、敏は、北園町の家で二度目の卒中を患ひ、静かに亡くなった。享年七十二。私も同じ年になった。敏の人生は平坦ではなかったが、立命館での晩年は、落ち着いた日々だった。敏は寡黙で、自ら進んで語ることは少なかった。昔を語らないタイプだった。

敏は本物のリベリストだった。戦中から戦後にかけて、大学教授や知識人の変身ぶりを眺めながら、「みんながカメラをぶら下げるときに、一緒にぶら下げたくはない」と言っていた。どんな時代でも時流にうまく乗る種類の学者とは肌が合わなかったようだが、そのことを公言することはなかった。

(立命館大学大学院法学研究科客員教授、元最高裁判所判事)